

# Relief

リリーフ

2014  
February

vol.14



南三陸復興支援 弾丸餅つきツアー（東日本大震災復興支援京都生協職員ボランティア 助成活動）

## CONTENTS

- 特 集                    集成
- 公 募 助 成            平成25年度公募助成(活動・研究)の紹介
- 連 続 講 座            第4回連続講座『いのち』を考える～生きることの苦悩と喜び～
- ト ピ ッ ク ス           救急フェスタin京都「いのちのリレー大会」の開催  
編集後記



公益財団法人

JR-West Relief Foundation

JR西日本あんしん社会財団

# 公募助成事業の紹介

JR 西日本あんしん社会財団は、「安全で安心できる社会」の実現に向け実施している事業の一つとして、身近な「いのち」を支える活動・研究を応援する『公募助成』を行っています。

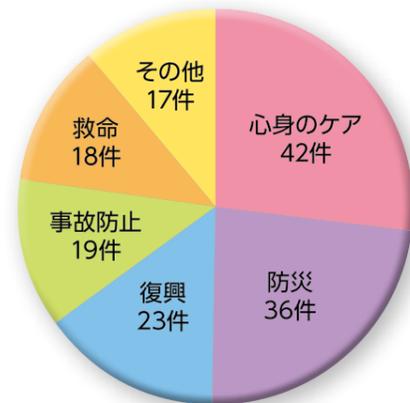
前号の巻末で平成 24 年度に活動いただいた団体による発表会の模様をご紹介しましたが、今回は、『公募助成』の概要に加え、本助成で実施いただいた平成 25 年度の活動や研究をご紹介します。

JR 西日本あんしん社会財団では、事故、災害に対する備えやその後のケアにつながる「いのち」を支える身近な活動や研究を広く募集し、助成を行っています。

また、東日本大震災や平成 23 年台風 12 号災害に関する活動を特別枠として設定しています。災害発生からの時間の経過とともに変化する被災者のニーズに応じた心のケアや復興等に関する活動に助成を行っています。

対象年度	活動	活動(特別枠)	研究	計
2010 年度	17 件	—	8 件	25 件
2011 年度	20 件	20 件	10 件	50 件
2012 年度	19 件	12 件	7 件	38 件
2013 年度	23 件	12 件	7 件	42 件
累計	79 件 (6,328 万円)	44 件 (2,416 万円)	32 件 (5,454 万円)	155 件 (14,198 万円)

※ 2011、2012 年度の活動(特別枠)は「東日本大震災に関する活動助成」として実施したものです



## ■研究助成(敬称略)

大阪産業大学工学部交通機械工学科 教授 大津山 澄明

### 『模型車両による衝突・脱線被害の解析と防災・減災構想の策定』

模型車両を使った衝突や脱線現象の再現により衝突被害を定性的・定量的に解析し、衝突や脱線による被害規模を想定することで、今後の防災・減災対策につなげる。

京都大学大学院地球環境学堂 助教 落合 知帆

### 『台風 12 号災害における住民の避難行動と災害経験の伝承』

台風 12 号災害における住民避難時の行動や周辺状況、地域相互の協力・連携の実態をまとめ、過去の災害経験との関連を整理することで、行政・住民組織の地域間連携体制を構築し、次世代に伝承する。

京都文教大学臨床心理学部 専任講師 倉西 宏

### 『遺児大学生への短期グリーフケアグループ実施の意義 - 悲嘆と人格変化への効果検討』

未成年時に親と死別した大学生を対象にグリーフケアグループを実施し、その前後の心理検査により悲嘆に関するグリーフケアグループの効果策定を行うことで客観性のあるエビデンスを得ることができる。

京都大学公共政策大学院 特別教授 小西 敦

### 『海外制度研究を梃子とする救急医療の法システム案の構築』

海外の救急医療に関する法システムを分析、そこから役立つ要素を抽出し、日本における制度設計に貢献することに加え、海外の整備状況の概要を公表することで、日本における立法化の機運を高める。

大阪大学学生支援ステーション 准教授 太刀掛 俊之

### 『災害ボランティア活動時のヒヤリハット体験と危険回避に関する研究』

行動学的な観点から災害ボランティア活動に伴うリスクを明らかにし、得られた成果を事前の安全教育に還元することで、将来の大規模災害の被災地におけるボランティア活動時の安全管理に有意義な知見をもたらす。

関西大学社会安全学部 准教授 永松 伸吾

### 『被災者雇用による被災者支援活動に関する研究』

大規模災害発生時に被災者支援に必要な人的資源が不足する事態に備え、被災者が被災者支援の場で活躍できる制度や必要なノウハウを整えらるとともに、課題解決についてのマニュアルを作成する。

和歌山大学地域連携・生涯学習センター 講師 西川 一弘

### 『公共交通機関乗車時における津波避難に関する研究～高校生・観光客を率先避難者に位置づけて～』

東日本大震災時の避難行動や全国の津波避難対策を調査し、公共交通機関乗車時に災害が発生した場合を想定した避難訓練モデルを開発し、乗客を率先避難者にするために有効な事前情報の内容を検討する。

## ■東日本大震災・平成 23 年台風 12 号に関する活動助成

### 東日本大震災復興支援 京都生協職員ボランティア 『南三陸町復興支援餅つき大会』

被災地での住民とのふれあいや心のケアを目的に、南三陸町の宮城県漁協志津川支所と、350 世帯 700 名の被災者が暮らす登米市南方仮設住宅で開催され、多くの方々の参加がありました。

被災者の方々は毎年この餅つきを心待ちにしているとのこと、カキ養殖作業所で働く方からは「朝から仕事も手につかないくらい楽しみにしていた。また来年も来て欲しい。」との声が聞こえていました。

登米市の仮設住宅では、テンポのよい掛け声が響く中、飛び入りで参加した被災者の方が慣れた手つきで餅をつく姿に、大勢の方から歓声があがりました。寒風の強い中でしたが、つき立てのお餅や炊き出しによって身も心も温まり、自然と笑顔がこぼれていました。



### R7 ～笑顔を送りよう Rits × MIYAKO プロジェクトチーム～ 『笑顔を送りよう Rits × MIYAKO プロジェクト』

R7 ～笑顔を送りよう Rits × MIYAKO プロジェクトチーム～からは…「私達 R7 は、東日本大震災で被災した岩手県宮古市で活動する学生ボランティア団体です。関西から来ているということ、学生であること、同じ地域で継続的なボランティアを行うこと、この 3 点を重視し活動してきました。2013 年度は子供達に楽しい夏の思い出を作ってもらおうと、8 月に宮古市を訪れ、学生であることを活かした科学実験教室、お昼にたこ焼きやうどんを子供達と一緒に作るなどの活動を行い、子供達との新たな絆が生まれました。」との報告をいただきました。これからは震災の風化を防ぐため関西での活動も行う予定だそうです。



### 東日本大震災・暮らしサポート隊

#### 『みちのくだんわ室(東日本大震災による県外避難者さんの癒しの場)』

東日本大震災の被災地から兵庫県内に避難されてきた被災者の方々の不安を和らげ、悲嘆を緩和してもらうための場を提供する取り組みとして、会場や趣向を変えながら毎月開催されています。

平成 23 年度からの継続した活動で、定期的に参加されているお年を召された方々への配慮や、お子様連れの参加者のためにスタッフがお子様をお預かりするなど、大人同士でゆっくり話をできる時間も提供されており、参加者それぞれの事情を考慮した有意義な場が提供されています。また、単に癒しの場を提供するだけではなく、被災者同士が県外生活における貴重な情報を交換できる場となっています。



### つれもて和歌山

#### 『平成 23 年台風 12 号被災者応援事業』

平成 23 年に発生した台風 12 号の被災地へ赴き、盲学校の生徒さん達によるマッサージや傾聴などのボランティア活動を支援し、被災者の方々へ心身のリフレッシュの場を提供しています。

マッサージをする側、受ける側ともに笑顔が見られ、施術を受け感嘆する声も聞かれました。また、日頃のセルフケアについてのアドバイスをするなど、コミュニケーションも多くみられました。会場全体では落語とギター演奏が行われ、ギターの伴奏で合唱をするなど、施術の待ち時間も有効に、全員が参加できる双方が生き生きとした場となっていました。



活動助成

「空色の会」～JR福知山線事故・負傷者と家族等の会～  
『4・25 あの日を忘れない！  
メモリアルウォーク 2013』

活動を通じ、列車事故の奥に内在する社会的な問題を顕在化し、当事者だけの問題ではなく社会の問題として捉えていくことや、社会的関心の裾野を広げる意味において、新聞やテレビ等のメディアを介し広く発信する場となっていました。途中事故もなく、参加者約40名全員完歩することができ、道中ではメディアを通じそれぞれの思いをお話されていました。事故現場では涙される母子の姿もあり、意義深い活動でした。



全国膠原病友の会（事業部）  
『緊急医療支援手帳 兼  
膠原病手帳の配布』

治療薬の服用が滞ると生命にかかわる膠原病患者が災害時に早急な医療情報を得られるよう、必要な情報を掲載した携帯用の手帳を作成・配布されました。



特定非営利活動法人 日本病院ボランティア協会  
『病院ボランティアの災害時マニュアル作成』

災害が起こった際に患者やその家族を支援する病院ボランティアの活動の指針を策定し、冊子を作成することで、病院ボランティアグループや病院に広く配布し、災害時の備えとすることを目的に、有識者の講演や、そのマニュアルの内容を説明する研修会が開催され、約80名が参加されました。



フレンズ川西フェスティバル実行委員会  
『JR福知山線列車事故被災者支援募金イベント  
～フレンズかわにし』

福知山線列車事故の風化防止を目的に「第8回フレンズ川西フェスティバル」が開催され、コンサートや福知山線列車事故に関する新聞記事等の展示を行うほか、事故被災者支援のための募金が行われました。地元の方々と連携を密にして、特に扇町総合高校吹奏楽部の演奏時には、2階席をも埋め尽くす盛況となりました。



特定非営利活動法人 遺族支え愛ネット  
『遺族の悲嘆を分かちあい、支えあおう!!』

大切な人を亡くした遺族同士で、悲嘆を分かち合い、支え合って、前向きに生きるための活動が5周年を迎え、記念特別講演会と小さなコンサートが開催されました。社会福祉法人「同和園」診療所所長・医師の中村仁一氏の講演と、ウクレレ奏者とソプラノ歌手のコンサートを行い、コンサートでは参加者が口ずさむ場面もあり和やかな時間を感じる会でした。



特定非営利活動法人 ジャパン・タスクフォース  
『ラダーレスキューシステム講習会』

日本のほとんどの消防に配備され、他の防災関係組織でも容易に入手可能な梯子（ラダー）やロープを用いた救助方法（ラダーレスキューシステム）の講習会で、今回の講習には全国から11名の救急隊員が参加していました。指導者は元消防救急隊員で、その後災害対応技術の進んだアメリカなどで高度な知識・技能を修得されており、非常に有意義な講習（座学・実技）が行われていました。指導者・受講者ともに非常に意識が高く、防災対応能力向上において意義深い事業だと感じました。



特定非営利活動法人 震災から命を守る会 和歌山県本部  
『防災・防犯まちづくり 命を守るための防災  
活動発表会&防災「地産地消」展』

災害時の行政の防災対策実務、役割・行動等や東日本大震災・紀伊半島水害の復興支援に従事している団体による発表会と地元生産の防災用品、非常食等の展示会を同時開催するもので、今年度で2回目の開催となります。「防災「地産地消」展」では地元企業の保存食やシェルター、避難所用の簡易トイレ、市民や学生による活動紹介に加え、自衛隊和歌山地方協力本部や和歌山気象台の出展もあり、バラエティに富んだ内容でした。



東日本大震災県外避難者の方々のブースに展示された防災グッズ

LSFA 乳幼児応急手当普及会  
『SIDS（乳幼児突然死症候群）研究セミナー』

SIDS（乳幼児突然死症候群）発生時には、ただちに心肺蘇生の実施が必要であることから、保育士のスキル習得促進を目的としたセミナーが開催されました。当初の定員を大幅に上回る申込みがあり、急遽規模を拡大する等、研修内容についてニーズの高さが窺えました。



東川崎ふれあいのまちづくり協議会 防災部会  
『東川崎防災ジュニアチーム「育てよう未来の防災力」』

防災の担い手の高齢化を受け、中学生を対象に組織した「東川崎防災ジュニアチーム」に消火・救急・救助・防災学習の定期訓練を行い、将来の減災力・地域の安全を牽引する力の醸成を目的に、消防署のサポートにより、専門的な要素の多い内容の訓練を実施していました。



桜ヶ丘2丁目自治会  
『子どもサバイバルキャンプ(防災訓練)』

町内の小学生を対象に、公民館とグラウンドで1泊2日のキャンプを実施。自分が使用する箸の製作、ペットボトルを使用したランタン作りや炊き出し、防災クイズ、救命講習、災害用コンテナに収納してある資機材の取り扱い体験などを通じ、災害時にはどのような行動をとればいいのか、子供達の知識向上と意識付けに加え、運営を通して大人の訓練も兼ねた活動でした。



三田市すずかけ台自治会  
『すずかけ台はみんなで助け合う安全・安心な街、地域ぐるみで取り組む自主防災訓練』

三田市消防署等との連携により、自主防災訓練大会を実施。災害時には避難所となる小学校で避難所の設営に始まり、消火訓練、初期救護、炊き出しなど、地域ぐるみで防災意識を高める訓練でした。



のびのびの木  
『アレルギーをもつ子どもと家族の為の防災キャンプ』

アレルギーを避けた食材による炊き出しや防災学習を盛り込んだキャンプを実施し、自主防災意識を醸成するとともに、参加家族による交流を通して、地域コミュニティ、ネットワークづくりにつながる活動となっていました。用意された食材1つ1つについて、アレルギーを持つ子ども自身や、ご家族が食べて問題ないかどうかを洗い出し、アレルギーを排除し残った食材で何を作るかを決め、それぞれの役割を分担し、実践的な昼食作りを行いました。



平成26年度公募助成の審査も間もなく終了し、助成先が決定となります。来年度はどのような活動・研究をお手伝い出来るのか、とても楽しみです。

平成26年度の助成先は、次号でご紹介させていただきます。

# 「『いのち』を考える」 ～生きることの苦悩と喜び～

平成 25 年 10 月から 12 月にかけて第 4 回連続講座を開催しました。今回も「いのち」をテーマに、10 名の講師の方々より、多岐にわたる視点でご講演をいただきました。



Profile

市原 美穂

特定非営利活動法人ホームホスピス宮崎 理事長

## 暮らしの中で死に逝くこと ～かあさんの家の実践から～

### 「人生の幕を閉じるとき、どこでどのように誰に看取ってもらいたいのか？」

宮崎市内で民生委員に出前講座を行なったときのアンケート結果をまとめると、次の 4 つが圧倒的に多い回答です。「住みなれた家が一番いい」「口から食べたい」「延命治療は受けたくない」「看取ってもらいたいのは、家族」。特に男性は「家内に看取って欲しい」と答えますが、今は奥さんが先立つケースも増えています。

この 4 つの条件はどれも日常の暮らしの中にあります。しかし、なかなかこの 4 つを実現するのが難しくなっています。

### 「看取りの場所というもの」

いまは 8 割の人が病院で亡くなっています。病院で亡くなる人が増えている結果「病院でしか死ねないのではないか？」と考える人が増えることにつながっています。そして、身近な人が死に逝く様子を見たことがないという人も増えており、特に老化に伴う自然な亡くなり方が身近ではなくなっています。

救急車を呼ぶという選択は「何とかして助

けてください」ということを意味します。

アンケート結果のように「延命治療は受けたくない」と願っていても、救急車を呼んで病院に搬送されれば「何とかして助けてください」という意思を表示したことになるのです。

後になって、「延命治療は受けたくない」と言う、「なぜ救急車を呼んだのか」ということとなります。このことを、私たちはよく考えておかなければなりません。

### 「かあさんの家の実践から」

私がこの活動を始めたとき、宮崎にはホスピス病棟（緩和ケア病棟）がありませんでした。ホスピス病棟を 1 つつくっても入れない人もいます。そこで「宮崎の町全体をホスピスにしよう」を合言葉に NPO を立ち上げました。ホスピス病棟をつくるなら在宅で過ごしている人をバックアップする、痛みがでたら病棟に入院して痛みを緩和し、状態がよくなったら戻ってくる。そんなホスピス病棟がほしいと、市と医師会に要望書を出し、医師会病院に緩和ケア病棟ができました。

この 10 年で、在宅で緩和ケアをするという医師が 40 名あまり、24 時間体制の訪問看護ステーションが 28 箇所にもなり、「住みなれた家で死にたい」と願えば 100% かなう町になりました。

それでも、介護ができないために家に帰りがたくても帰せない人がいます。在宅で看取れない人を「どげんかせんといかん」と思い、空いている民家を借りて一緒に住めばいい

じゃないか、とスタートしたのが「かあさんの家」です。

現在、宮崎市内に 4 軒あります。1 軒に入居者 5 人、ヘルパー 5 人の介護体制で、普通に暮らすことを支えるというのが私たちの目標です。

普通に暮らすとは、朝起きて、ご飯を食べて、排泄をして、おやすみと寝ること。誰かのサポートを受けないとひとりでは生活できなくなった人たちの「普通に暮らす」をどうやって支えるのが課題です。

食事の支度をするに、洗濯機の音、隣の犬の声、そういうものを感じられる日々の生活の中で幸せを感じられるかどうかが大切だと私は思っています。

もう一つ、一番大事にしていることが、自分のことは自分で決めること、つまり本人にとって一番大事なことは何なのかということです。要介護者の状況によっては、本人では何も判断できません。意思を伝えることもできません。

本人が意思を伝えられないと家族の気持ちが優先されているような気がします。だから、常に「本人のお気持ちはどうなのでしょうね」



と家族に問いかけることで「本人にとって一番大事なことは何か」に引き戻す必要があるのです。

### 「看取るのは家族」

私は、看取りの主人公は家族だと思っています。息が止まったときがその人の命の終わりではなくて、少しずつ衰えていく過程を見守る。

「かあさんの家」ではこのプロセスをきちんとたどっていくことで、グリーンケアというかわゆる悲嘆のケアは、ご家族にはあまり必要ないように思います。

遺族の方は、かあさんの家に顔を見せ、一

緒に暮らしていた人たちの世話をしてくれま

す。また、今実際に看取っている人に「私のときはこうだったよ」と話をしてくれます。

私たちは、みんないずれは旅立ちます。そのときに、きちんと次の世代にバトンを渡していくのは医療関係者ではないですよ。

自分が臨終、死ぬというその床にあるときに、そばにいてほしい人がそばにいてくれたら、私はそれが一番のホスピスだろうと思います。

ですから、そういう人にきちんとバトンを渡していくには、やっぱり家族にそばに居てもらう必要があると考えたのです。

人生の幕をおろすときは自然で、最期は穏

やかであることが最も価値があるのではないかと思います。

何としても生きていかなきゃと思えば、やっぱり医療に頼りますよね。今の医療は、「何としても死にたくない」と願えば生かしてくれます。

しかし、それは自分にとって価値のある選択だろうか。

考え方は人それぞれですから、自分の幸福はこうだと自分の価値観をつくってあげばよいと思います。

「かあさんの家」の看取りのただそばに居させてもらって、いつもそう感じています。

## 第 4 回連続講座でご講演いただいた先生方

徳永 進 野の花診療所院長  
「いのちのあと」

大西 秀樹 埼玉医科大学国際医療センター 精神腫瘍科教授  
「『遺族外来』から見つめるいのち」

香山 リカ 精神科医、立教大学教授  
「『いのちの選択』がもたらすもの」

坂下 裕子 こども遺族の会 「小さないのち」代表  
「遺族の『意味づける』ちから」

柏木 雄次郎 関西福祉科学大学教授 日本緩和医療学会理事  
「緩和ケアでの出会いと別れ」

入佐 明美 ボランティア・ケースワーカー  
「日雇い労働者のいのちと出会って」

葉 祥明 絵本作家、画家、詩人  
「芸術が人生に教えてくれること」

カール・ベッカー 京都大学こころの未来研究センター教授 京都大学大学院人間・環境学研究科教授  
「高齢者の生き方と選択を考える」

高木 慶子 上智大学特任教授 上智大学グリーンケア研究所特任所長  
「悲嘆力」



## 救急フェスタ in 京都 「いのちのリレー大会」 開催!

平成 26 年 1 月 19 日 (日)、京都駅前地下街ポルタのポルタプラザにて「救急フェスタ in 京都」を開催しました。メインイベントの「いのちのリレー大会」では、倒れている人を発見してから救急隊に引き継ぐまでの救命処置の流れを 3 人 1 組のチームで協力し、競い合っていました。

京都市内に在学中の小学生 4 組 12 名、高校生 11 組 33 名の方々に出場いただき、若さと緊迫感あふれる競技の連続に、会場は活気と熱気に包まれました!



協力合って心肺蘇生法を実施しました



電気ショックを実行します! 離れてください!



審査員の皆さんも真剣です



京都橘大学救急救命研究会による  
デモンストレーション



多くの方に応援していただきました

優勝チームのインタビューでは「競技を通じて目の前で人が倒れた時、どのような処置をしたらよいのか勉強になりました。」「うれしい。これからの為にもなるし、将来活かしていきたいです。」と頼もしいコメントをいただきました。



### 競技結果

#### 小学生の部

**優勝**: 京都市立修学院小学校  
Y3チーム

**準優勝**: 京都市立修学院小学校  
カウンターチーム

#### 高校生の部

**優勝**: 京都橘高等学校  
京都橘高校チーム

**準優勝**: 京都精華女子高等学校  
ピヨピヨチーム

**特別賞**: 京都精華女子高等学校  
みるくすももチーム

### 編集後記

残寒の候、皆様風邪など召されずにお過ごしでしょうか。間もなく3月を迎えますが、新暦でも別名として用いられる「弥生」の由来は、草木がいよいよ生い茂る月「木草弥や生ひ月」が詰まるとされるそうです。皆様と共に財団も新年度に向けて良い「Start dash!!」が切ればと頑張っています。(編集者: 吉國)

〒530-8341 大阪市北区芝田二丁目4番24号  
TEL: 06-6375-3202 FAX: 06-6375-3229  
E-mail: info@jrw-relief-f.or.jp  
URL: <http://www.jrw-relief-f.or.jp/>